

斎藤緑雨「鶉網」改稿に関するノート

池田一彦

斎藤緑雨の「鶉網」は、緑雨作品中で初出と初版の間における改稿の跡が最もいちじるしい作品である。初出は『大同新聞』で、「紅露生」の筆名を用い明治二十三年九月二十七日から十月十七日にかけて連載されたもので、全十四回から成る。後に『見切物』（明治二十七年八月五日発行、春陽堂）に「弓矢神」「柴小舟」と共に収録された。『見切物』収録本文の末には「（明治廿三年九月作）」とあるが、これは初出時の年月を記しているのではなく、本文の改稿時を示すものではない。厳密な改稿の年月日は現在明らかではないが、恐らく『見切物』の出版時に比較的近い時期ではなかったかと推定される。本稿は、その初出本文と初版本本文との異同を元に、「鶉網」改稿の跡のおおよそを辿る試みである。

「鶉網」初出本文は、「(一の上)」から始まって各回を上下二回に分け「(七の下)」に終わる章立てであるが、『見切物』初版本文では、「(一の上)」と「(一の下)」を「(一)」にまとめ、「(二の上)」以下をそれぞれ一回分として「(二)」から「(十三)」までの全十三回で完結するようになってゐる。以下、ここでは便宜上後者の章立て・本文に即して「鶉網」の粗筋を予め纏めて置きたく思う（従つて、初出本文と大なり小なり齟齬を来す箇所が出て来るが、それは後の異同を辿る際に触れて行くこととする）。

とある待合に三十四五から四十歳位の男が三人集まり一癖ありげなお神に逆に世辞を使つてゐる処から話は始まる。肥つた男が阿蘇岡、苦味走つた男が富士村、もう一人が木曾田と言う。内儀が一人二人芸者を呼ぼうかと言うのを富士村は制し、西国風が頻りに吹いてからの芸妓は御免、先達でも西国ちゃきちやきの愛宕子爵を遊びと名がつけば錢を遣うのは当然、そうでなければ寧ろ遊ばぬが良いとやつつけた自慢話を披露、内儀はそれでも芸妓を勧めるが、富士村は得意の一中を唄おうとする。今度はそれを阿蘇岡が混ぜ返して制止する。やがて食事も済んでお神も消えると、いよいよ今晚会合した肝心の計画の段へ。阿蘇岡が大手、富士村が搦手、木曾田が遊軍隊と役割を定めての悪事の密談が交わされる(一)。

さて、大門通りの鉄物問屋千曲屋は、先祖の孫六が国を捨て江戸へ出ての奉公から勤勉と儉約とで成つたものだったが、富限の家の生まれ育ちとて二代目の吉兵衛は手抜けも多く漸次家の方も傾いたので、母方の伯父によつて隠居させられる破目となる。伯父の眼鏡に適つた店の手代を吉兵衛の妹お嘉代に娶せたのが即ち今の主人仙右衛門で、何よりも勤儉を第一と銀行会社にも株式にも目をくれず、経済策に励んだ働きにより傾きかかった

家も見事再興したのだった。お嘉代との間に儲けた子は二人とも早逝したが今一人残った仙三郎といううぶな息子を両親は珍重し、高いを見習わせるのだったが、今年二十三の仙三郎は店の者等が隠し持っていた草双紙を覗いて以来、教訓亭（為永春水『梅暦』）にも手が届き、これより子と親それぞれに苦勞の種を蒔くこととは相成ったのであった（二）。

学校より帰れば儉しく食事と入浴と就寝を繰返して成長した千曲屋の一人息子仙三郎は、『梅暦』愛読の結果、演繹法に帰納法にどう考えても丹次郎たるべき資格ありと我から極めたのが自墮落の始まりで、店先を折々通る十六七の娘に懸想されたと妄想を膨らませたり、父親が許嫁を決め置かなかったのを託ったりしていたが、ある日父の名代として仲間の参会へと行くことに。酌する女に手が顫え、『梅暦』の洒落も風雅も忘却し只管酔ってその日は散会したのだったが、他日誘われて廓に行き何とかいう女と一夜自由に語るを得、屹度ですよの一言に忽ち古今の色男と成り済まし、女の名を硯に書き続けたり横町へ曲った女の後姿を追っては失望したりする始末、これを見込んだのが富士村阿蘇岡木曾田の三名なのだった（三）。

ある日千曲屋を訪れて名刺を投じたは阿蘇岡暗雄、暖簾の陰の黒塗りの車に仙右衛門も欲心をかき立てられ、商売上の相談と言うを聞けば、阿蘇岡等が発起で東京より秋田へ鉄道敷設したので金属一切の請負を千曲屋に願いたいとの申し出、これには仙右衛門も乗気になる。まだ許可は下付されぬもので云々との阿蘇岡の弁舌に百五十年即ち昨年の夏弘国に於て博士ダメナリ氏の発明に係った自在鉄道というもので云々との阿蘇岡の弁舌に仙右衛門も煙に巻かれ、請負を約束する。株式会社計画で許可も無い今日早くも満株となつてと、阿蘇岡は勅選議員の新聞号外に見たばかりの九名の株主の名前を連ね、その日は一先ず帰宅する。それより阿蘇岡は二日置

き三日置きに訪れては銅や鉄の相場話をキツカケに話し込み、景気の好い話を仙右衛門に吹きかける。後に技師とのふれ込みで木曾田浩二を伴い来て、二人は代わる代わる千曲屋に入り込み、仙三郎とお嘉代等にも取り入るのだった。やがて二人は、わざと仙右衛門の用ある日を選んで書遣わし、相談があるのでと両国丙子楼ひのえねまでの人來を促す。遣わされたのは仙三郎（四）。

仙三郎が丙子楼に参着すると、阿蘇岡と木曾田を左右に控えた富士村駿造の紹介となり、酒肴が振舞われる。富士村の指図で芸妓の小七姫松玉吉が呼ばれると、小七姫松が阿蘇岡木曾田に絡みかけるの一条あって、玉吉が仙三郎の側にいるのをからかい始めるや、いずれも申し合わせたように仙三郎に口を向け出す。千曲屋の若旦那だと富士村が明かせば、小七と姫松は仙三郎に音羽屋張りだの栄ちゃんだの染五郎だの新蔵だのと褒めちぎるので仙三郎は喜びも一入、直接に間接に玉吉とお似合いだよと持て囃されてすっかりその気になるのだった。そうなるとう向きはどこへやら、富士村の発議で七人は丙子楼を出て先の待合宿浮名屋に赴き、思い思いの慰みを尽くすことに。その後、この界限に仙三郎の姿はしばしば見られることとなった（五）。

千曲屋先代の主人吉兵衛は歳六十に及び、子供を多く喪つて唯一人残つた末娘お里と余生を送っていた。はじめ吉兵衛の家を仙右衛門に譲るに当たっては、彼の伯父の計らいで、たとえ仙右衛門の働きで家運が立ち直るところがあつても相続者は吉兵衛の子孫より取り立てて系図は一代替りとの契約を証書に認め、且つ月々五十金を仙右衛門より吉兵衛に貢ぐことと定めてあつたのだが、欲気の勝る仙右衛門は漸く吉兵衛を疎んじ始め、約束の五十金も三十金、廿円と減じる始末。一方お人好しの吉兵衛は仙右衛門に気兼ねして、機会を見て仙右衛門と話し合いもし、今年十八になるお里を仙三郎に娶せ四代目にしようかなどと考えていた。ところが、運悪くも吉兵衛

の隠居所の隣りは富士村駿造の宅で、お里の風邪見舞いが縁で両家は昵懇の間柄となっていた。不図した話から千曲屋の約束を富士村は聞き付け、阿蘇岡木曾田と語らい自らお里の掣となつて千曲屋を横領しようとの企みは生じたのだつた。富士村は早速吉兵衛を説き丸め吉兵衛の欲心を搔き立てる（六）。

富士村は蓮葉ならぬお里も次第に手なずけ、吉兵衛を抱き込んで仙右衛門を降伏させるべく阿蘇岡木曾田を千曲屋に出入りさせ、仙右衛門掌中の珠の仙三郎も見事に誘き出したので、機到れりとして頻りに吉兵衛を説いて再三仙右衛門に譲り渡しの談判を聞かせるのだつた。そうとも知らず欲ある仙右衛門は予てよりこの件に心を砕いていたのであつたが、吉兵衛に先を越されて証書も三年延びたと急ぎ立てられ困じ果てる。そこへ富士村よりの知らせて阿蘇岡が尋ね来つて、朋友の誼とて力添えを申し出るので仙右衛門も心を許し、千曲屋をこれだけの身に代に仕上げたのは自分一人の力で云々と内情を明かせば、阿蘇岡は談判事に長けた富士村を紹介しよう言い、先方に二百も遣れば済むと法螺を吹き立てる。仙右衛門は援けを乞い、阿蘇岡が予て頼みおいた借金三百をみすみす渡し遣わすのだつた（七）。

浮名屋の奥二階には玉吉と仙三郎が密会中。父親がやかましいので余りしみじみとは逢えないだろうと塞ぐ仙三郎に、玉吉は浮気を疑うようなやり取りあつて後、仙三郎は五十円包みを与え、それから先は痴話口説、百や二百はおろか五万年も永く生きて夫婦一つ体でいたいようなことを言い合つたりする。家が面倒なら無理をせずとも時節を待っていると舌たるい玉吉の言葉を真に受けて、店の刻限十時に仙三郎が立ち帰ると、内儀が玉吉へ耳打ち、下座敷に控えたは富士村駿造であつた。仙三郎が置いて行つた金を早速山分けの段となるが、玉吉は三十円貰つたことにして富士村に十五円差し出す、残りは玉吉の懐へ、知るは内儀唯一人（八）。

仙三郎は家を外の有頂天、玉吉に富士村という虫があるとも知らず二十三十の無心も聞いて逆上させている。母のお嘉代早くこれに気付いて意見しても聞く耳持たず浮ついているに、仙右衛門もいつか勘付き、店で失った三百足らずに銀行へ預けた筈の六百何円の紛失も仙三郎の仕業と判明、自らして来た苦勞やらこの度の名跡一件やら織り交ぜての強意見を二時間余り立て続けるも、お嘉代出て来て執り成せば一段落となる。だが、喉元過ぎればで仙三郎は又ぞろ玉吉に心浮かされ、今度は母の臍練りを持ち出したのが露見して、遂には勘当されるのであった。お嘉代がそつと袂に入れてくれた金を持って、未来の良妻と惚れ込んだ玉吉の住家を頼りと行けば、始めの世辞も仙三郎が勘当されたと聞くや冷たい仕打ちへと遽かに変じる（九）。

鉄道敷設の計画も許可を得て、創立事務所を三十間堀に置いたが、会社にあてた家は借物で敷金も皆納したでなく二三の器具も未払いの有り様、委員というのも富士村等三名がいい加減に名を騙って罨の網を張ったまでのこと、新聞紙へ役員募集の広告を出して代わる代わる会社に待ち構えていたのだった。玉吉に見限られた仙三郎は四五日の間は遊び仲間の元を訪い回っていたが、小遣いも尽きて初めて悔悟の念起こり、何か仕事に有り付きたいと思い、彼の会社を頼らんと富士村の宅を訪えば冷やかなる待遇に阿蘇岡を頼めと言われ、翌日阿蘇岡を訪えば同じく木曾田を頼めと言われ、木曾田を訪えばこれも富士村阿蘇岡と申し合わせたように断られる始末、一人困った仙三郎は考え込んだ挙句郵便配夫となったのだった（十）。

郵便配夫と落ちぶれた仙三郎は漸く懲りて、迷いの夢も覚めては足を元手と駆け歩くに、かつて遊んでいられた頃の芸妓や幫間は勿論、親戚縁者から番頭手代丁稚まで知った顔を見られるのが恥ずかしく世を忍んで屈託していたが、使う金にも不自由しつつ福井町辺の裏家の二階を自分賄ないの又借りをして面白くもない様子であつ

た。一月足らずして浅草橋辺を配達することとなったが、その翌月初め不凶一葉の端書を富士村方へ配達する際、門前に躊躇しつと思わず掟を忘れてその端書を読めば、なんと今晚の入来を乞うその差し出し人は例の玉吉、局へ帰って腹痛と称えて暇を乞い日の暮れるを待ち元柳町の玉吉の家の前へと赴けば、見覚えある澤瀉紋の提灯を下げた車が到着する（十一）。

家に入ったのは富士村駿造、玉吉と二人二階へ上がれば母親らしき人煙草盆に茶道具一式を運ばせる。慌てて路地口へ逃げ込んだ仙三郎は、始めまごついていたが芥箱を足場にやがて物干しへと攀じ登り、窓にピツタリ寄り添って耳を欝てるのだった。漏れ来る男女の声に戸の干割れ目よりそつと覗けば、一目謂れある間柄とは知れた。人を馬鹿にした二人の会話の我が事であると自ら覚り、無念に堪えず足踏みしめる拍子の音に富士村が起ちかかるのを玉吉は制し、会話は続く。いつかの手筈はと玉吉が問えば、富士村は旨く行つて千曲屋を乗っ取る分だが一足退つた所で身代山分け、一割の札を阿蘇岡が取るか自分が取るか、先ずあの身代を十万円と積もつても自分の喰い扶持には困らないと答える。と、玉吉は富士村が自分ではなくお里を目当てにしているのではないかと疑い攻めて痴話口説となる。仙三郎は富士村等の奸策を嗅ぎ出して、一家の大事と家の仇恋の仇たる連中を退治すべく、物干しより転げ落ちながらも父と伯父の元へと走り去るのだった（十二）。

仙三郎は息せき切つて吉兵衛の家へと駆け込んで、父親の所へ同道を求める。訳の分らずいる吉兵衛に富士村の企みを今聞いて来た通りに説き示せば、吉兵衛も驚き二人して千曲家へ。折柄いつもの如く帳簿を広げていた仙右衛門は、吉兵衛が仙三郎を囚代りに抱き込んで来たかと仮病を使うもしぶしぶ応対、富士村の名を聞くや胸を打たれ、名跡一条はどうなるうとも何方からか礼金をせしめればよく、又お里を手なづけ千曲屋を横領したい

との目論見もあるのだと仙三郎の嗅ぎ出して来たままを語れば、さすがの仙右衛門も喫驚仰天。三人にメて六百も出してしまったのも見切ることとして、家の大事を聞き出した仙三郎は勘当御免とは相成るのであった。翌日三人は彼等の宅を訪い回るも会社とのことゆえ三十間堀の事務所へと赴けば、門前に同会社の広告に欺かれて身元保証金を納めて沙汰の無いのを談判に来た人々に富士村等が言い訳している真つ最中、吉兵衛等三名連れ立って入ったを見るや富士村等は逃げ出すのであった。詮方なく吉兵衛の家を引き上げれば、隣の富士村は既に空室となっていた(十三)。

以上が「鶉網」の粗筋であるが、次にその初出本文と初版本本文との間の異同について具体的に見て行こう。便宜的にこれも各章ごとに両者を突き合わせて見て行くことにする(共に原文総ルビであるが、ルビは適宜省略する)。

先に触れた如く、初出の「(一の上)」と「(一の下)」とが合わさって初版の「(一)」となるのだが、「鶉網」全体の中でこの章が最も異同が大きいと言える。初出からの大幅な削除が二箇所認められるからである。だが、それについて見る前に、両者の書き出し部分を引いて「鶉網」改稿の実態の一端を窺うこととしたい。

秋風通ふ夢の浮橋ツ恐れ入るねと床の間の一軸知つた顔にきかせて紅色の皮蒲団遅れやしたナと足の先で直したもの、一々物言をつけて偕て坐つたるハ歳三十四五眼すこし丸けれど謂はゞ苦味走つたる男振、容子大

いよろしく一寸見て惣手のある顔なり面明りハ御免と燭台と申した所が実ハ底なき竹籠を冠つたる洋燈推
退け明日ハ陰曆十五夜とあるに帷子ハ異だが昼間からの興行続きでと下婢を顧みて浴衣拝借と願ひたいと再
た立つて御召替へ世話のやけたことなれど馴れたれバ万事器用なり隣なるハ洋服着て肥太りたる四十男眉を
かしく反つたれど口元の愛敬鳥羽絵にハ惜しく今ひとりハ背高く瘦せてぞべら〜と京男めきたりおれも我
れもと各々着更へのお揃ひ姿、初手酌れたる茶の冷たるを手に執る時漸く坐ハ定まつたり頼むよの一声に酒
出づれば早い鳥だネと注文の一品早いよりハ安い方なるべし。
(初出)

何事の在しますかハ知らねどもサ、お神が居ねバ何うも納まらぬよと捨台詞言ひながら足の先で坐蒲団を直
したるハ天晴の行儀と申すべし一人ハ歳三十四五眼の少しくルリとしたるハ如何なれど謂はゞ苦味走つたる
男振相応に泣かせやすとも云たいらしく一人ハ洋服着たる四十男眉をかしく反つたれど口元の愛嬌鳥羽絵に
ハ惜しく今ひとりハ背高く瘦せてぞべら〜と京男めきたり面明りハ御免と燭台と云つた所が実ハ底のない
竹籠を冠つたまでの洋燈推退け何でも早いがい、よとの註文ハ早いより安い方かも知れず
(初版)

浴衣の着替えに関する情報が削られたということはあるものの、総じて初出の本文の方が説明的でくどく冗長
であるとの感は否めず、初版の本文の方がすつきりとして分かり易くなった感じが窺える。「一人ハ」「一人ハ」
「今ひとりハ」と畳み掛けて述べて「洋燈」の一件を後に回すなど、後者の方が読み易く整理された趣きがある
のである。「何事の在しますかハ知らねどもサ、」の入りも滑らかで、「天晴の行儀と申すべし」と第一文を締め

るのも、登場人物に対する作者緑雨の評価としてすんなりと読者の脳裡に定着するものの如くである。浴衣に限らず「紅色の皮蒲団」「明日ハ陰曆十五夜」「下婢」「肥太りたる」「早い鳥だネ」等の細部がごっそりこそげ落ちていたが、その分簡潔になっていると言つてよからう。

さて、「鶉網」の書き出し部分については以上のようなことであるとして、以下の改稿について見て行こう。

右に続いては、癖のあるお神の紹介となるが、初出では「三十にハ二つと云て其二つハ手前か先か判じ物、小説家が謂ふ残んの花申にくいが釣上りたる目少々気に懸りお神さんと云れて引締たる帯じやらくらと目まぐるしく、この形を見て下さいといハ一通り卑下したお詞と思へバおれ程の器量を捨て、頓着の無い所が買物だらうと何ごとも我といふ虫が大真実、」とあつたのが「末三十に二つと云つて其二つハ手前か先か詳かならず甚だ申憎いことには目尻の少々釣上りたるが気懸りなれど昔の作者に云はすれ残んの花お神と云はる、度毎にわざとのやうに帯引締め此の態を見て下さいといハ一応卑下したお詞かとおもへバおれ程の器量を捨て、頓着の無い所が買物だらうとの底意恐しく」というやうに微妙に書き換えられたりしている。先に見た書き出し部分のような顕著な違いは認められないが、漢字や送り仮名から句読点類までを含めた表現・言葉や記述の順序などが改変されている。極細かな相違だが読点が省かれているのは、緑雨得意の『かくれんぼ』（明24・7、春陽堂刊）の文体により近いと言えるし、又、「残んの花」という形容の常套句を巡つて「小説家」から当時の文学史的文脈に即して「昔の作者」に変えられたのなどは、「小説（評註）」（『読売新聞』、明23・1・17〜25）で「古風小説」と「今様小説」とを切り分けた作者に如何にも相応しい。「形」から「態」への漢字の変更も目につくが、「鶉網」全体の改稿の様子を窺うに案外この手の漢字の変更が多いことを予め指摘しておこう。尚、初出の方に「何

「ごとも我といふ虫が大真実」との文言が見えるが、これは「油地獄」の初出本文（『国会』、明24・5・30）6・23）の冒頭に、

治まるも我乱れるも我、盛えるも衰へるのも興るも^{すた}靡るも、浮くも沈むも清むも濁るも、大小長短広狭厚薄の別なく世へ悉とく我である。我の命令に由て生れ我の命令に由て死ぬ、天下へ我の戦場だ。

（（一の上）やれ其もとへ歴史の事）

とあったのが想起され、当時の緑雨の関心の有り処の一つに「我」があったことを窺わせるものである（共に初版本文では削られてしまったけれども）。

続く箇所、客が内儀に逆に世辞を言う処は次の如くなる。

其心こちらでも覚ればこれへくいつもながらの人柱お綺麗なことでござる鬚もかはれば後ろから見たいもの気が悪くなり申すと親にも聞かせられぬ世辞百遍客に云はせて何ですエとお澄し召さる^{さか}扱^{さか}まの世なりけり。
（初出）

客も其辺へ万々承知これへく計り花やかで御座るのあてやかで御座るのと口に納税の義務なきま、逆ま事の世辞百遍^{さう}爾でもあらうと内儀へ只ニツコリ何ですエとお澄しなさる、こと我之れを物の本に見たる如才

内儀と雲泥万里お立替くゝの板挟みにツイ店をお閉めなさるも無理ならず

(初版)

初出の方で言わんとする処が、初版本分では「逆ま事の世辞百遍」と簡潔に言い纏められている。「これへくゝと計り花」とよく知られた安原貞室の古句を折り込んだり、「物の本に見たる如才内儀」の掛け詞や「納税の義務」のような新時代を当て込んだ言い回しを用いることによつて、文章的には少し長くなりこそすれ或る種の洗練を勝ち得ていると言えよう。これらの表現上の工夫を通俗的とか古風とか批難する立場もあり得ようが、良くも悪くもこれが緑雨的な修辞であり、文章なのである。

さて、「(一の上)」は、以下続く部分がばっさりと削られている。文字数にして約八百五十字、「(一の上)」全体の約五割弱の文章が削除されているのである。その始めの部分は次のようである。

伝馬町へお入来があるかね。い、エちつとも。でもありやすめエ然し小石川との件もあるから。イヤ小石川と云はゞ我々恨骨髄に徹して居るが何処を敲いて回はつても銀行家一般の不評我々を見殺しにする料見だね。ダガ私共ハ総裁賛成サ不評くゝも久いものだがと此処で金融論も古いから廢めるが富士村君の恨骨髄ハ他に因縁ありさ然かも近因だ。北一条か彼れハ失敗サけれども私の失敗でハない私の彼れに対する地位ハ恰も比叡口の踏台たりしに過ずだ

富士村が深く執心していた吉原芸妓をまんまと或る金持ちの紳商と覚しき人物に持つて行かれたという、富士

村の失敗談が符牒めかした言葉を交えて延々と語られるのだが、間瀬田屋だの垣輪屋だの富士村の遊び仲間だの話は錯綜して、容易に事柄の全体的イメージは読者の脳裡に像を結ばない。初出本文で読まれた読者の頭は多分に混乱すべき一段であろう。

「(一の上)」には、右に続いて約二百五十字弱の一節があり、富士村の説の後に内儀が自分の店の芸妓を勧めたり、富士村が一中節を唄おうとするのを阿蘇岡が混ぜっ返して制したりといった場面が描かれているのだが、この一節は初版では「(一)」の最後の方、三人の密談の直前に書き換えた上で移し置かれることになった。

ところで、初出の「(一の上)」と「(一の下)」とが合わさって初版の「(一)」となると述べたが、その割合は単純に五分五分という訳ではない。もともと「(一の上)」が約千八百字、「(一の下)」が約二千三百五十字と、「(一の上)」の方が一割三分方文字数が少ないということがあるのだが、初版の「(一)」に占める「(一の上)」の割合は約三割、「(一の下)」の割合が約七割となっている。次にその「(一の下)」と初版の「(一)」との関わりについて述べる。

初版の方では末尾の三人談合の直前に飯の済んだことだけ触れられるのだが、初出「(一の下)」の冒頭ではその飯の始まりだけが触れられるという風になっている。内儀が阿蘇岡に「誰か二三人」店の芸妓を呼んでやってというのが初出なら、初版では「誰れか一人二人」と数が減じる。それを遮る富士村の科白と阿蘇岡の反応。

何だ芸妓か芸妓ならバ廢止たるべし阿蘇岡君ハ芸妓家だがと云ふと直ぐ揚足だらうが政治家法律家経済家何でもえらく見せるにハ家の字に限ることサ飛で回はれバ車夫も奔走家世話をすれバ口入婆くちいればあも周旋家かるが

ゆゑに阿蘇岡君ハ芸妓家。イヤハヤ長い冒頭まくらだお株の説明的だから叶はない。

(初出)

何だ芸妓か芸妓ならば廢案の事阿蘇岡君は芸妓家だといふと直ぐ揚足だらうが政治家法律家經濟家何でもえらく見せるにハ家の字に限ることサ飛んで回れば車夫も奔走家世話をすれハ口入くちいれ婆も周旋家虎列これら拉患者を担ぐなどハ殊に有志家だよ。だから私ハ芸妓家かネ毎度ながら長いまくらだ。

(初版)

言い回しはもとより、微細な点まで挙げて行けば、漢字や送り仮名、変体仮名やルビ等の書き換えが行われており(変体仮名については余り深い意味は無い可能性が、又、ルビについては単なる誤植の可能性があるが)、「虎列拉患者」の一件が加筆されて、畳み掛けの面白味が増した。但し、それ以外には、ここは初出の文章と初版の文章とその味わいに大きな差異は無いと言ってよからうと思われる。

以下、細かい点は省いて行くこととして、続いては富士村の「遊び」論が語られる。ここにも初出本文と初版本文の異同(細かい相違と削除・加筆がそれぞれ一箇所ずつ)が認められるが、特筆すべきは「(一の上)」と同様の大幅な削除が次で行われたことである。富士村の芸妓改良論だが、約千百五十字分丸々削除されて、その分約二百字余りの書き換えの文章が置かれることになった。その削除された部分は、以下のようである。

序つひでだから私の芸者改良げいしやに関する意見と云ふのをお話し申すが。オット暫く〳〵定めて論旨ハ適切で廢芸妓論げいぎの比でハあるまいが時正に九月だよ。九月に芸妓論げいしやは法律が禁じたかネ。ナニサ九月は何うでもい、が其の

芸妓論が。治安妨害や風俗壊乱の憂へちつとも無いよ。無からうが何が何だソレ何がサ寧競牡丹を頂きたい
 ネ木曾田さん。マア宜やネ遣したまへ富士村君の宿論だ。其処だテ宿論ほど恐しいのへない木曾田さんへ兎
 角命を疎末にするよ仕方がない一席伺はう。阿蘇岡君爾恐れた者でへないよ。左様さ当人が恐れてへ療治の
 届きやうがないから。御挨拶だ爾聞く上は猶ほ遣るよ併し長いことへない委くへ不日私が口述して「芸妓沿
 革論」といふのを書生に書せるから今晚へ眼目といふ所だけにとゞめるよ。それが命取の随一だらう。先づ
 聴れよ今日迄芸者改良に就ては新聞記者等も再三論じたが偕新聞記者ほど暗い者へない。論語読の論語知ら
 ず広く浮世に通じたやうで通じないのへ新聞記者サ彼等の言ふ所へ所謂皮相の見いつ迄経つても破れ机の前
 で英雄を論じて居た形が脱けないから斯の如き実地問題に至つてへ到底与に談すべきでない

以下、富士村は滔々とこれまで世に現れた改良論を六つまで挙げ連ねその一々を論駁して行き、「其今日風俗
 の淫猥に流れたへ芸妓其者の罪にあらざる客たる者の罪なることへ明かだから之れが改良方案を立てるにへ芸妓よ
 りも客の行なひに目を注ねバガツチリ適つた名案へ出ない抑も私の意見と云ふのへ」云々と弁立てて行くのだ
 が、木曾田の欠伸、阿蘇岡の居眠りに富士村も悄気て暮となる。初版ではその部分が削除されて、「勿論皆が皆
 芸妓の罪といふでへない客も客イヤ寧ろ全く客の罪だ名古屋の何とか楼に居たと聞くとソレへ手があるだらうへ
 恐れるよ」云々と富士村の持説が開陳されるように手短かに書き直されている。

この後、先の「(一の上)」の末尾部分に移し置かれ、今晚三人の会合した計画の密談となる。初出では、「愈
 よ明日から三立目幕明き。役割へ。阿蘇岡君が大手へ回れバ木曾田君が搦手私へ遊軍隊と願はう。」とあつたの

が、初版では、「愈よ近日大入おほいりとしたいものだ。役割は。阿蘇岡君が大手へ回れば私ハ搦手木曾田君ハ差当り遊軍隊と願う。」とその役割が変えられた。富士村が中心の悪事計画であるので、これは改稿の方に説得力があると言えよう。また、細かい点で言うと、この章の最後部は、初出で「Battle」とアルファベットが小文字であったものが、初版の方は「—BATTLE—」と大文字になっているということがある。

総じて、初出の「(一の上)」と「(一の下)」それぞれからの削除が極めて多いのは、富士村の語りを削ることによってこの章全体、ひいては「鶉網」全体から富士村の印象を薄める方向で改稿が行われているからと考えることが出来るだろう。「鶉網」の千曲屋を巡る詐欺未遂事件を極立たせる為にも、悪人役の登場人物の内一人だけキャラクターを突出した形で強調することが抑えられた形である(富士村が主犯格であるのに違いはないのだが)。それに加えて、本作の主人公は富士村でなく飽くまで千曲屋の仙三郎だという事情もあつただろう。

さて、次に初出の「(二の上)」と初版の「(二)」との間の異同について見るに、ここは異同が少ない方と言える。少し長目のものから極短いものまで言い回し・表現の変化(加筆と削除を含む)が数箇所、あとは漢字を中心とした表記の変更・読点の省略等の細かい改稿が施されている箇所が相当数あるにはあるのだが、ここでは特徴的と見える二点を具体的に示して置くことにする。

一つは、初出書き出し部分の変更。

処ハどこでも勝手なれど鉄物問屋かなものどひやと云へば差当り大門通りなるべし欲にハ問口もんぐちが最う一間と表から見て難を

云へど底あり蓋あり裏へ回れバ奥行で二間延びた蔵造り動かざること千曲屋の屋台骨室ハ積んで山の如しと
極りきま文句を今更の紺暖簾染かへて新しき日もあれバ其老舖しにせたるハ用水に鑄りるつけたる字を見て知るべし

とあつたのが、初版では第二文以降が削られて「処ハどこでも勝手なれど鉄物問屋と云へバ差詰め大門通りなるべし」と大幅に切り縮められた。千曲屋の裕福な老舖であるのを説明するのにやや冗長で持つて回つた表現であるのを嫌つた為であろうか。緑雨らしいと言えば緑雨らしい文章ではあるのだが。

もう一つは、末尾部分の書き換え。

いつとなく親の心弛めゆるバ仙三郎ハ却つて当世の芽を吹出し店の者の隠して玩もてあそぶ草双紙を覗きしより遂に梅
曆に手が届けバそれからが仙右衛門丈苦勞の種となりぬ

とあつたのが、

いつとなく親の心弛めバ仙三郎ハ却つて当世の芽を吹出し店の者等が蝶柳斎をも欺く前垂の下の手品に隠し
てあつた草双紙といふものをチラと覗きしより遂に教訓亭に手が届けバ子ハ子の苦勞親ハ親の苦勞の種をそ
れから蒔きぬ

と書き換えられた。「蝶柳齋」という手品師の名前を出したのは、時宜に適ったものであったかも知れないが、これは寧ろ初出に名を出してあったのを、より普遍性を持たせる為に改稿して初版の方で削った、という風な流れであった方が却って自然であるような気もする処である。後で、「竹の舎」(饗庭篁村)や「龍溪先生」(矢野龍溪)、更には「脱顛子」(幸田露伴)のような当代作家の名が、初出では出されていたのに初版本文では削られたという例が見られるので、その伝で行けば、初版で初出本文に無かった「蝶柳齋」の名が書き加えられたのは、その傾向に逆行した感が無くもないのである。但しは、「蝶柳齋」の名には、それだけ明治二十年代を覆う普遍性があつたということか。因みに「蝶柳齋」は、西洋手品の元祖として知られる三代目柳川一蝶齋のことである。

続く初出の「(二の下)」と初版の「(三)」の本文との間には、先に見た初出「(一の上)」「(一の下)」と初版「(一)」との間に見られた異同に次ぐ、かなり大きな異同が認められる。一つには、初出本文の冒頭部分約九百字が削除され、約五十字から成る全く別な文章に差し替えられたとすることがあり、今一つには、本章の中盤を中心として文章に大きく手が入れられ、書き換えられたとことがある。

先ず前者。初出本文は、以下のものであつた。

竹の舎の極秘を学ば、最早この辺へ町内の鳶頭とびがしらなる者現はれ来り内氣の若旦那をおふくる様の囑託しゅたくに依つて煽り立て花天月地の踏案内みちしるべといふ所なれど千曲屋のひとり息子仙三郎ハ其面倒もなく世話もなくヒヨンなことあふから小本的道楽者たるの現象を已に生じぬ、夫れ倩せらつらつらおもみるも手数ながら墨の痕二つ三つある鞆を肩

に掛けて尋常と高等とを割書にしたる小学の門をくゞる頃にハ古今紀要一冊に天下の大勢を察し坊ちやま忽ち豪傑となつて今にも看よ戦争起らバ我れハ差詰め大将軍城壁を本所深川に築き大川を壕ほぼに代へて敵攻来らバ両国橋を切て落すと迄ハ一息に考へ附いたれど熟よく思へバ後うしろの方が丸明きゆゑ是でハ行かぬ寧芝いづそを切取て愛宕山とりでに砦とりでを設けアノ石段を馬に乗て駈下かけおり駈登ること三度に及ぶ勿論もちろん箠むちに梅を挟さしたり其時後に声あつて出合へくと呼はるにぞ振返つて見てあれバ相手の面つらハいつでも獯惡ひつく引組ひくんだま、僅たうと落ちるのハ宜いいが若しや華表とりみで脳を打てバ翌日学校へ行かれない行状点が取れないとこ、で趣向まが再た変り偶たままの運動会上野へ行けバ真先に市中を見渡し友達の内にも及第を苦手と鼻の下に見え透いたやうなるを捉へて汝を関白たまたにすると遣つた所で我れハ相馬平氏の嫡統ちやくとうにあらずこの桜の皮を剥取つて天勾踐てんこうせん工、何故刀を廢したのだらう

以下、仙三郎が、自分がいたら南朝を勝たせて正成を総理大臣に、(万里小路)藤房も宮中顧問位にはしてやったものをと想つたり、尊氏の弟(直義のこと)——たかよし筆者注)をナホヨシと読んで笑われたことを憶い出しては、行き過ぎた先生一同を武者絵の四王天但馬守(明智光秀の重臣——同前)の心持ちで追い駆けたり、自分が蘭丸だったら信長は殺させなかつたらうと想つたり、貴顕の馬車に遇つては馭車を叱し、自分が大臣だったら子供(仙三郎自身の事)を乗せたらう、いつそ養子になりたい、馬車で学校へ通えば先生は自分を宮様と思つて周章でたらう……いつしか「考へることも考へることもチャンポンと」なつて眼鏡橋近く差し懸る——という内容の文章が続くのだが、この一段が全く削除されているのである。初版で差し換えられたのは、

英雄も人なり色男も人なり人といふ人皆英雄にて皆色男ならバ今すら面白からぬ世の幾層倍面白からぬことか数が知れず

という極短い、後年のアフォリズムを彷彿させるような文章であつた。書き縮めた改稿の典型的な例である。因みに、初出の方の内容は、子供時代の妄想癖を活写しているので、これは先にも触れた緑雨の代表作で「鶉網」の約七ヶ月後に発表の「油地獄」の最初の興味深い序章（初版本『油地獄』（明24・11）ではこれも全文削除されたのだが）の「（一の上） やれ其もとハ歴史の事」「（一の下） さて其あとが小説の事」で展開されている。「歴史的妄想」「小説的妄想」の論と同工異曲の内容と言える。これも「鶉網」全体とのバランスを考えて、余りに冗長の感があつたので削除されたものと思われる。

さて、もう一点の大幅な書き換えについてだが、全体の約半分程度の分量の文章が手を入れられている。内容的に大きな差異は無いのだが、単語のレベルから文章丸ごとのレベルに至るまで、かなりの量の書き換えが行われているのである。先に見た冒頭部分に続く、全体からすると五分の一の辺りまでは殆ど変化は無いのだが、更にそれに続く中盤辺りは逆に殆ど文章が変えられており、その傾向は終盤に至るまで徐々に改変を減じながらではあるが続いて行くといった様相を呈している。だが、今その一々を論つていては煩瑣なることを避けられないので、ここでは幾つか主立った処を示すに止めたい。

先ずは、書き換えが集中して行われる、その初めの箇所。初出で、

斯の如きこと繰返し繰返し成長し後に不世出の英雄となるかと思へば多くは弁当吏と墮ちて受付の椅子に独り不平を洩らし無理の中から女房を持ちて一生うだつの上らざるもありとか、今ま仙三郎の心あやしく動き出たるも究むれば同じ訳なり先づ梅暦をひらいて三枚と読み行けば女ハ男を恋ふる者と覺り

とあつたのは、

斯くの如き事を繰返し繰返し成長した中から英雄の出るも色男の出るも共に不思議なれど其英雄の多くハ受付の椅子に胸突出して腰弁当の佃煮に舌を打ち其色男の多くハお祭の地走の跡から駈て歩いて新道の師匠が御苦勞様の一声に莞爾ついで居るも亦不思議ならずや千曲屋のひとり息子仙三郎も全体ならバこの辺へ町内の鳶頭なるもの現はれ来り何分にも内気者の事宜しく囁みますとおふる様からの辞令を得て煽立てると云ふのが筋なれど梅暦愛読の結果其面倒もなく世話もなく

と書き改められた。初出本文よりも初版本文が長くなっているが、これは、初出冒頭の「鳶頭」一件をここに繰り込ませたのと、初版で差し替えたやはり冒頭の「色男」一件を受けた文章に直した為の、「鶉網」改稿の全体から言うるとむしろ例外的な一節と言える。総体には、「鶉網」の改稿作業は、初出本文を書き縮める方向で成されているので、例えば右引用箇所の後も、初出で「我れ宜く丹次郎たるべきの資格ありと断定し我が心のまゝ、の女を眼の前にゑがき出して一言一句苟くもせず必ず教訓亭の原書とひき較べ肚裡に宛然一の濡場を造つて娯

しが漸く進んで」云々とあつたのが、初版の方では「丹次郎たるべき資格ありと我れからの極めが自墮落の端緒」と要約的に引き締まった形に書き改められている。

次に、右に直ぐ続いての箇所。

我店先を折々通行する何某屋の娘年頃十六七なるを是れ屈竟と形取り来り彼れが名へ定めてお蝶と云ふなるべし忍ぶハ暗夜のこと艶書ハいつ来べきや「恋しき仙さま蝶々」嬉しや其返事ハと我れ知らず仕入帳ダイナシにし初めて心づけバ彼れハ他家の生娘一体お蝶ハ許嫁の筈だ親父も気が利かない早く許嫁を拵へて置けバと

云々とあつたのが、

我店先を折々通る娘の恰も好し年も十六七なるがいつも此方側へ寄て行くを日陰ゆゑとハ知らず鼻の先の墨をニヤリと見て笑つたのまでが何うやら物らしく互ひに忍ぶハ闇の事「恋しき仙様まる」と今にも何か来さうと云ふよりハ来べき筈に心得て許嫁のないことを親父の気が利かぬ第一に数へ

云々と書き換えられた。初版本文の方は「日陰ゆゑとハ知らず」と少し皮肉に突き放した表現が採用され、また初出には無かつた情報が書き加えられているのだが、一方、「許嫁のないことを親父の気が利かぬ第一に数へ」

というのは、初出本文に見える「彼れが名ハ定めてお蝶と云ふなるべし」「一体お蝶ハ許嫁の筈だ」等の文句が省かれて、却つてその理由が分りにくくなり、何か唐突の感を拭えないものになつてしまつた、ということがあ

る。他には、細かいところで、初出の「父の名代みやうだいとして組合の懇親会に赴けバ」「梅曆の洒落も風雅もこの時ハ夢の如く忘却し何れいづを米八とも仇吉とも分きかねて」というのが、それぞれ初版では「父の名代として仲間の参会とやらへ行けバ」「梅曆の洒落も風雅もこの時ハ現うつのやうに忘却し何とも彼とも分きかねて」となり、その間に配された「恥しさの間に嬉しさを緬なへま交せて」が「恥かしさと嬉しさをチャンポンといふ語も矢張字引に無し」と改められたということがある。「チャンポン」は、削られた初出冒頭の本文末尾にあつた「考へることも考へることもチャンポンと相成て」から抜き出され、ここで復活させられたものである。

初出の「(三の上)」と初版の「(四)」との間には、殆ど異同が無い、と言つてよい。

これも幾つか目につくものを挙げれば、冒頭部分では「帳調べの折柄子僧飛んで側に参つて旦那さま此の御方がと差出だす名刺」とあつたのが「帳調べの折柄旦那様此の御方がと子僧が飛んで来て差出だす名刺」と順が逆になつたこと、「遅れての申込が奈良原森岡川田富田」の最後の一名「富田」の名前が削られたこと、「土産物数多あまた取らせ是れハ丸新でござる是れハ木原店きはらやでござると仙右衛門が好める品々馳走すること度々なれバ」という一節が単に「土産物数多取らすれば」と切り縮められたこと、この章末尾で「態たくみとの較計たくみと仙右衛門ハ知らざれバ」とあつたのが「我れひとり正直の仙右衛門も頭かみに宿る神ならねバ」と書き改められたことなどが主な変更点

である。

初出の「(三の下)」と初版の「(五)」との間の異同も比較的少ない方である。数ヶ所、表現が書き換えられているのが目につく程度。以下、その主なものを示して置く。

章の冒頭部「出るに利無しと仙三郎ハ知らざれば」とだけあったのが「凡そ出る事といへば畳の縁へりから蚤の出るのも禁物の仙右衛門可あつたら惜悴をむざ／＼と出だし遣りしに仙三郎は自分すら浮々したる心に人の齒の浮くゞらゐは懸念に及ばず」と珍しくここは書き足されている。父仙右衛門に関する情報を書き加えられ、親子の対照が極立たされた。続いて、「富士村ハ調子重く見せかけて頤たまにそれぞと勿体振つたる指さしづ揮を」は「富士村ハいかにも鷹揚らしく頤たまにさするハ奮たに勘定と返事のみたに止らずオイと勿体振つたる指さしづ揮を」と、これも少々緑雨流に書き換えられた分だけ長くなった。小七に関して「能く饒舌しやべる女だ」とあったのは「不相変あひかはらずの螺旋仕掛ぜんまいじかけ」と変わり、「仙三郎が内心の大喜悦丹次郎を凌駕するに至らん者ハ我れなりと合点したるぞ初々しき。」は「仙三郎が耳みみにハ神のお告を聞く心地孰たれか今代こんだいの中の郷たるものぞと内心の喜悦すさまじく。」に、「大刀だんぱを仙三郎ハ好んで受領し段々しりぞみと逡巡する内にも嬉うれさハ無上なり」は「大刀だんぱの下にめでたく往生を遂げたりける」に、「わざと舌たるき所に狐媚こびをさ、げ色ほつちやりと白く眼におびたゞしき愛嬌あいせうを持つたれハ仙三郎早くも玉吉にポツと参りたるを」は「わざと舌たるき其わざとが何日いつもおとし込む狐きつね畏仙三郎のポツと参りしを」に換えられている。末尾近くで、

取離とりなすに彼の丈八かが台詞せりふならねど首筋元からぢわ／＼我われ為めに未来の米八たり仇吉たる者これを措いて

他に覓む可からずと迄登り詰め隣座敷より漏来る唄も嬉しい。恥しいと龍溪先生の所謂いの韻を踏むの心地せられ今鳴るハ八幡鐘かとハ飽迄も梅曆春水翁地下に瞑すべし

とあつたのは、「龍溪先生」と「梅曆」絡みの部分が大きく削除、又改稿されて、

取囃すに今丹足下唯夢の如く今のハ八幡鐘かとハさてく修業の積んだものなり

と書き縮められたが、これはこの章で最も大きな改変と言えるだろう。最後に、末尾の一文「其後ハ阿蘇岡木曾田へ宛て、仙三郎からおいでく」が「其後此の界限に此色師の姿をみること一度や二度にあらず」に換えられているが、ここは初版の方が却って説明的に感じられ、初出表現の方にむしろ文章の軽快さがあるように思われる。

初出の「(四の上)」と初版の「(上)」との間には、殆ど異同が無い。助詞や副詞、漢字の変化などの細かな差異を除けば、十文字前後の書き換えが僅か十数箇所認められるだけである。この章の面白い処は、後半に

思ひ設けぬ掘出し物と一体の趣向を之れに採り(初版では「其処から趣向を割て出て」——筆者注、以下同様)阿蘇岡木曾田の兩人を味方に加へて(初版「加へ」)先づ仙三郎を古今の阿房たらしめ己れお里の聳と

成つて千曲屋を横領せんとの目論見なりと斯う始終を打明けてハ（初版「は」鶉網もお仕舞なれど凡そ（初版「そもく」）新聞の続物の理想でも写真でもそんなことハ構つたものにあらず倦の来るを防ぐにハ色々薬を調合し懣じ文を（初版「懣じ文を」削除）氣取れバ分らないと云はれ偶ま洒落を書けバ俗に（初版「偶ま」以下「洒落れバ」のみ）通じないと云はれ何と云はれ彼と云はる、中をクダラなく繋いで詰らないの掛声を合図に（をはり）と遣るが（初版「遣るのが」エライのなり

といった「新聞の続物」（＝小説）執筆に関する柴屋落ちめいた文章が差し挟まれている点である（以上は、改稿の問題ではなく専ら「鶉網」の内容に関わる事柄であるけれども）。

初出の「（四の下）」と初版の「（七）」との間の異同も少ない方だと言える。漢字や送り仮名、ルビに始まり、単語レベル・語句レベルに至るまでの細かい改変は他の章と同様として、十数箇所の言い回し・表現の書き換えが目につく程度で、その主立ったものを挙げれば、以下のようになる。

書き出し部分、「今頃ハお里と富士村と胸から胸へ浮橋の架けられたるハ当然なりとすと此程の裁判言渡書に見えた訳でも何でもなく矢つ張り今日の書出しなりされどお里ハ物堅く」とあつたのは「今頃は最う何とかならう筈なれど流石出が大家だけお里は爾も蓮葉ならず」と書き締められ、その後、「此の言けりが肚に宿らバ一転するか一躍するか孰れにも唯だ一足の違ひにて陸奥のしのぶ文字摺我ならなくにの恋と乱るべき筈のものなれバ富士村が眼にハ最早十分手に入つたる如く見え」というのは「此の言けりが一転すれば外の言けりと言けりが違

ふ言けりともなる訳ゆゑ富士村は最早十分手に入つた料見朝鮮征伐の太閤様にも譲らず」と書き改められた。前者は、新聞連載用の文句を中心に削つたのであり、後者は古歌を採用しての修辭が（先に見た「これハ〜と計り花」の場合とは逆に）省かれたものである。代わりに「朝鮮征伐の太閤様」が加筆されているが、これは余りに（執筆当時の）現代的な事象・人物名が省かれる傾向があるのと逆に、歴史上知らぬ者の無い人物であるから、イメージ喚起力の強い割には特に作品を後世古びさせる恐れは無い、本来書き縮めにも有効な種類の書き足しと見てよからう。この章末尾の「表へ出で車に乗るや行く先ハ例の梁山泊富士村木曾田が定めて待つなるべし」は「表へ立出でしが此夜何処にか鼎に坐つて前祝の酒に舌鼓を鳴らしたる者あるに相違無し」と思わせ振りに書き換えられている。

初出「(五の上)」と初版「(八)」との間には、かなり大きな異同が認められる。先に見た初出「(一の上)」「(一の下)」と初版「(一)」、初出「(二の下)」と初版「(三)」との間の異同の大きさに次ぐものである。初出本文約千七百字中、冒頭部約七百字分の文章が丸ごと削除され、初版本の方は全体約千五百字中、三分の一に当たる約五百字余りの文章が、代わりにこの章の冒頭に据え置かれたのである。

削除された初出冒頭の文章は、以下のようなものであった。

無智無識なる一種の新聞記者ハつねに好んで芸娼妓の内幕を評き出し公然艷種と称して之れを紙上に掲載し威福濫用の上備へにあらざるべきも妙に變に厭味の文句を付して恥づることなく却つて其数多きを誇れり

是れ或ひは營業的の三字に制せられたるものあるべしと雖も然れども其罪たる事理を解せざるの甚だしきに帰せずんばあらずそも、花柳の地の我等が棲息する同一天地の内に於て區別せらるゝ所以のものハ彼の内幕でふことの作用に成たる異空氣の充滿すれハなりされハ昔の明盲ガ之れを仙郷と云ひけん程の大なる誤謬ハなく芸妓といひ娼妓といひ何れも内幕のあるべき筈の者を捕へて罵詈訕譏し嘲笑し誹議するが如きハいかに貸本教育を以て化せられたる新聞記者たりとも少く塩梅すべきにあらずや予ハ彼等の悪事を賞するにあらず予ハ彼等の醜行を贅するにあらず悪事醜行の原素たるを以て限られたる花柳界の内幕を摘発し来るハ恰かも雨降るの日傘をさしたるを笑ふに似たりと云ふものなり否な其種の新聞記者が攻撃の手順を誤りたりと云ふ者なり若し花柳界に係ることの筆誅すべき要あらハ醜行あるべき芸妓を悪口せんより醜行あるべからざる紳士輩の之れに手出しするものを堂々と攻め平ぐべし簡言すれハ娼妓ハ供給者なり紳士輩ハ需要者なり悪風習の之れに伴ふあるの場合に於て其先づ責むべきハ需要者にあるか供給者にあるか予の言ふを俟たざる所なるべし請ふ花柳種専門の新聞記者先生今姑らく芸妓の俳優を買ふを書くを休めよ娼妓の幫間に色あるを書くを休めよ暗夜あはれみを大臣の門に乞ふて白昼途に老幼に驕るの徒の我等同胞の徳操を乱るを誅伐せよと何故か今日ばかりの長まくら堅いハ一切御無用なる浮名屋の奥二階に男女ふたりの影坊子これ玉吉と仙三郎なり。

小新聞記者出身の緑雨ならではの、「予」という語り手による「花柳種専門の新聞記者」論が開陳されているのだが、そして万に斜に構えて穴を穿つ緑雨独自の批評眼は終生変わらなかつたし（晩年の秋水宛の書簡に至る

まで一貫している)、これはこれで貴重な意見として十分面白いものではあるのだが、如何せん、小説「鶉網」全体の文脈からは食み出し過ぎてゐる。新聞連載時であれば辛うじて許されもしようが、単行本に一篇の独立した小説として収める際には、やはり多少なりとも不都合であつたらうから、これが削られるのは納得出来る処置ではある。但し、単行本収録用にこの「長まくら」全体を大幅に削除する方向で手直しすることとして、全十三章から成る、その各章の長さのバランスとも言うべきものがあつたであらうから、この初版「(八)」の章冒頭には、削除した文章に見合うだけの一定の分量の文章を書き足す必要が生じた筈である。そうした事情を踏まえて、この章の冒頭に置き換えられたと思われる文章は、以下の如くである。

生れ落^{おち}から伽羅^かの香^かに埋^めつて目脂^{めぢ}鼻糞^{びせん}にも人手をかけてお育ち遊ばしたる身がお邸^{べっだう}の車夫馬^{べつだう}丁と手に手を取つて駈落^{おち}なさること今でハあまり珍事ならぬ割合には夫婦兄弟は勿論いとこもはとも六畳一間に夜の物を引張合つて芋の如く転つて居る中から左^さのみの間違も起らぬ所を見れば教育といふもの一向^ま当にならず八兵衛権兵衛のお話ハ町所^{ちやうせう}から生れ年まで麗々と記されながら位^ゐとか爵とかハ附けバ名をいふも憚つて何がしの君で済んで行く新聞の雑報から見れば公然なるに許されず秘密なるに許さる、道徳といふ奴も思つたほど難有いものでハ無し況んや教育も道徳も取除^{とりの}けの部分に属し根から葉から紅白粉の色一式に飾着けたる別世界に於てをや貸本から馴染が出来て按排よく字を並べることにて得て、ござる新聞屋とかいふ人ハこれを七生の讎敵で、もあるやうに扱下^{こまわ}し腐れた水は汲替へずに湧いた子^こ子を咎めてござるハ甚だ以て心ゆかず世が世なれば何れ其位^ゐの事は有勝ちの浮名屋とて看板に偽りなき手練手管の奥二階に男女ふたりの影坊子これ玉

吉と仙三郎なり一体ハ仙三郎と玉吉なりと書くべきなれど権八小紫安珍清姫蘭蝶此糸の二三を除くの外いつでも女の名が先ゆゑそれならでは夜の明けぬ国の仕来しまたりにまかせて斯くは記すものなりと著者ま白す。

後年のアフォリズムを思わせる「教育」「道德」批判やら、初出に通ずる「新聞屋」への批難やら、これも緑雨持ち前の鋭く皮肉な視点からの発想が巧みに表現されており、「著者白す」とした人物の名前の順に関する一節などにも著者一流の機知が感得され、以下の本文への接続も滑らかになったと言える。これでもやはり小説「鶉網」の本筋からは些か外れてはいるのだが、初出本文のやや生硬な論説口調の本文に比べれば、文章・内容共に格段と初版本全文体に馴染むように書き換えられていると言えよう。

以降は、例によって、漢字・句読点や助詞から十字・数十字程度の言い回しに至る、大小合わせても十数箇所みの異同が見られるのみだが、幾つか主なものを例示すれば、「新橋でも芳町でも」が「何処へでも」に、「お楽しみ。」が「こゝは古風にお楽しみとでも云ひたい所だ。」に、「口も宜加減いにおた、きよ小く数でこなせば同じ道理サと差出す拾五いいか。御尤もく山分かと云へバアイと差出す十五円」が「よしてお呉れ数でこなせば同じ道理サと差出す拾五円」に書き直されたなどが挙げられる。

初出の「(五の下)」と初版の「(九)」との間の異同はやや多目で、極細かいものも含めれば約四十数箇所に手が入っている。大きく書き縮められたり削除されたりしたのが計六箇所、書き足されたのが三箇所あるので、以下にそれを示すこととする。

冒頭部、「兎角小本の先入主となり我れから箔を洗ひ落して遂にまよひの鬼となるそれも何ゆる恋衣襟かき合はせてオホンたる仙三郎が浮名屋通ひこ、を敵地と白浪のよるひる分たぬ有頂天」は「先入主となる小本もどき兎角ヤツなど、言たがりて仙三郎は家を外の有頂天」と修辭を廢してさっぱり書き縮められたが、ここは初出の本文に却つて面白味を感得する向きもあるかと思われる。その後の「いつぞやの別れに羽織へ着いた白粉の香を日の下開山色師の勲章と触れちらし女除けの守今あらば差当り一万枚は一手で引受けたいと真面目手放したはけ口に」は全面的に削除されている。「吐瀉子の韻文でいなければど誰も氣に留める程のものもなきに」も同じく削除され、「脱顛子の鉄槌で敲き割つても魂ひの既に先様へお預け申したれば当分悔悟の色へ出合はず何の彼のと仮托けてセツセと馬鹿を運ぶにぞ」は「既に先様へお預け申したる魂ひの性もなく浮附き居るに」と書き改められた。共に明治二十三年の時点における文学的事象に関わる時事ネタめいた部分が削られたのである。章の中程、「何の為だ何うか此身代を悴へ譲りたいもの又一つには御先祖の名を汚したくないもの」とは「何の為め外でもない汝へ譲りたい此身代」に、また後半部「今の石鹼のあぶくと化し曲のさまぐ大玉小玉と裏町で温習ふ清元の玉屋の玉が難有い」は「今は全く石鹼のあぶく、玉と聞くさへ難有い」へとそれぞれ書き縮められている。逆に、後半部には、立て続けに三箇所書き足しがある。「喉元過ぐれば熱さを忘れ」とあったのは「いろは短歌に所謂喉元過ぐれば熱さを忘れて」、「猫の耳へユニテリアン程の効験もなければ」とあったのは「馬の耳へ念仏も古めかしければ猫の耳へユニテリアン程の効験もなく」、最後部「おしゆんもお妻も三勝も浦里も当節は皆悉売れ切れに御坐候」とあったのが「おしゆんもお妻も小春も小いなも三勝も浦里も夕霧も十六夜も当節は皆悉売れ切れに御坐候」とそれぞれ書き足されたのである。前二者は、ことわざや枕詞的な修辭を付け足すこと

で、全体に文章が弾みのついた調子のよいものになったと言えるし、三つ目の名前の挙げ列ねは、敢えて数多く畳み掛けることで、文章に遊びの要素がより強くもたらされることになったと言える。他に一例、単語レベルで「看客諸君」とあつたのが「読者諸君」に変えられたことを書き添えて置きたい。

初出の「(六の上)」と初版の「(十)」との間には、殆ど異同が無い、と言える。漢字と送り仮名の変更を除けば、十数箇所書き換え・削除等が認められるのみで、それも内容には関わらない、専ら言い回しに係るものである。「返事と勘定ハ頤を以てするの境遇にも及ばぬより初めて悔悟の念萌し」が単に「初めて悔悟の念起り」と改められたのや、「私ハ敵役の木地で」が「私ハ木地の敵役で」と順が前後した辺りが目立つ位であろうか。

さて、初出の「(六の下)」と初版の「(十一)」の本文の間には、比較的大きな異同がある。四百字余りの書き出し部分が約八割方に書き換え、書き縮められたのがそれで、あと中盤以降にも少々目立つた削除と書き換えが認められる。

先ず、初出本文の書き出し部分を見よう。

七百貫目の借錢負ふたる伊左衛門にハ鍼はりと按摩の厄介に預る迄逆上のぼせあがりたる夕霧のありたればこそ紙衣かみこの着き栄えも見えなれ似て非なる千曲屋の悴仙三郎ハタツタ一箇ひとつの明石玉に魅せられ世間知らずのウブな心より大金を費つかひ棄てまんまと首尾好く阿房銘鑑に名を列ね持丸もちまるの若旦那で立通たてとほさるべき身が我れから苦勞を駿河するが

半紙へ鉛筆で書いた文字同然消えも入りたき思ひ寐の夢もほんやり夜を日に継いで首に陣笠の縁へ離れざること申上まをしあげます升の代理役郵便配夫と落ぶれて袖に涙の玉は懲々くらんだ眼まなこもさめくくと降る雨風厭はず恥を一代に曝さらすこといぢらしいとも可笑をかしいとも譬たとへんに物も梨の種蟻も滅多にハ構つてくれぬ浅ましあさましの姿とハ成下りたれど自分でハ是れも廻り合せと無理に諦あきらめ先達さきて頃ハ兎角色と酒だと鼻歌入はなうたで手遊おもちゃにして居たる浮世を今度ハ逆まに見て麦六むぎむのま、ならぬと感あずり一切双六の塞翁が馬、足を資本もとと駆けあるくのが一日の職分と斯こう類似枕詞を陳列してハ想起録おぼえで叱られるかも知れず日珠さまへ朝参りの芸妓

云々とあつたのが、初版本文では次のように書き換えられた。即ち、

昔の愛想づかしには青江下坂といふのを振廻し跡で遺書わきあきを読んでプツと驚くなど、いふのがありたれど今では色紙の紛失も警察のお手で間に合ふゆゑ其そのな物騒ものさわなことのするにも及ばず煙管筒きせつを握にぎつて砕けよとばかりと云ひたいが砕くものなら屑屋くずやにでも売つた方が徳ゆゑ密ひそと腰へ挿して忌々しいの口先だけで事が済むハ流石開明の世は便利なものなり気の毒や千曲屋の悴仙三郎ハ世間知らずの眼に明石玉の鑑別わんべつ附かず尋常でさへ居ゐれバ持丸もちまるの若旦那で立通さるべき身が首尾よく阿房銘鑑あへいめいに名を列ね我れから苦勞を駿河半紙へ鉛筆で書いた文字同然消えも入りたき思ひなれど今更返らぬ事を郵便配夫と落ぶれて袖に涙の玉と聞いてハモウ懲々迷ひの夢のさめくくと降る雨風厭はず世ハ双六の塞翁が馬、足を資本と駆けあるくに道了様へ朝参りの芸妓

云々という文章に改められたのである。主旨は変わらず、仙三郎が郵便配夫と落ちぶれて迷いの夢も覚めて仕事に勤しんだ、というまでのことであるのだが、初出の表現を或る程度踏襲しつつも（順が逆になった箇所もあるが）、初出と初版の文章では、随分と趣きを異にしているとの印象を禁じ得ない。初出の方は、著者自ら「斯う類似枕詞を陳列してハ」と言った処に象徴される如く、面白くはあるがやや修辭過多の気味があるのに比して、初版の方は、その辺が大幅に整理・削除されており、冒頭を受けて「流石開明の世は便利なものなり」と皮肉を交じて難無く収めたのと併せて、大分文章がこなれたものになっているという気がするのである。勿論、矢野龍溪の「想起録」のような時事的な話題に係る一節は、例によって削られている。

次に、中盤以降の箇所であるが、「安宅の関より晦日の関が大禁物米屋の縄暖簾を此方からモミ手などで、誰やら風の片仮名のかけ言葉際どい所で洒落たくも洒落られぬ境界」とあったのが大幅削除、改変されて「安宅の関より晦日の関が通りかぬる仕合せ」となり、その直ぐ後、「親の難有味ありがたみのこの頃知れたるなるべしと牛の涎よだれのだら／＼と書いた所で語り仙三郎の面白くない有様で御坐つたと云ふに過ぎねバ景容けいようの駄文句のこゝらで切上げて本筋に入らん」云々とあったのが「親の難有味のこの頃知れたるなるべしと斯ういふ風に文章も持て廻れバ行数ハ牛の涎のだら／＼と延びれど語り仙三郎の面白くない有様で御坐つたと云ふに過ぎず」と事々しい書き様がさりげないものに書き換えられたのが目立っている。

あとは、例によって大小約二十箇所の異同が認められるが、言い回しに関わるものが多く、幾つか特徴的なものを例示すれば、「考へれば考へる程詰らなく相成来り」が「考へれば考へる程下手の将棊の休むに似て何うも詰らず」に、「二月足らずが間仙三郎へ前申す通りの次第で消光居たるに」が「二月足らず経たる内に」に、「筆

の跡あやしげに書つゞくりたるハ正しく女の便りと思はれ」が「あやしげなる筆の痕」と書き換えられている。

初出の「(七の上)」と初版の「(十二)」との間の異同は、数から言えば約三十箇所と、少々多い方である。これも、言い回しに關わるものが殆どで、内容的に変化がある訳ではない。代表的な処を列挙すれば、「足何とな
く震ふの心地なりけれバ」の削除、「仙三郎心せきたち今と成て考ふれバ我れ斯く落魄る、迄弄そばれたるハ全
く渠等ふたりが謀じ合せての上の較計なりけり踏込んで腹癒せと髪逆立てしもいや／＼と胸を撫で」が「さてハ
と思へど」に、「おのれツと齒を噛み」が「無念に堪へず」に、「お里さんと云ふのに思召しありで其智と成て千
曲屋へ乗込むと云ふのが本筋の奥の手だと」が「お里さんと云ふのに思召しがあるのだと」に、「三立目で果て
る訳だから実ハ心配でと男の顔を差覗くに」が「三立目で果てる奴といふものだからあまり落附いても居られま
せん」のサと斜に視るに」に、「処が爾でないノ貴郎のやうに悪事の有ツ丈を仕尽すとあ、云ふ娘さんが寧よくな
るのよと」が「処があ、云ふのが寧い、ものサと」に、「父に報じて」が「父なり伯父なりに通知せて」に、最
後「仙三郎ハ起上がつて一散走り浅草橋の方へと逃がれ行けり跡に新板ものハ尽しの合方も古けれバこれハ今度
出版の人の心を見ぬく法其第一が浮氣の男女を見分ける法若い女に好かれる法五十余通り明細に判つて一枚が
僅二錢あ、大同新聞ハこれよりも猶ほ五厘安し買はずんバある可らず」が「仙三郎ハ起上がつて一散走りに逃
れ去りぬ」に、それぞれ書き換えられている。一二の例外を除いて、ここも全体に書き縮める方向で筆を運んで
いると言えよう。

最終章、初出の「(七の下)」と初版「(十三)」の本文の間には、細かに数え立てれば約二十数箇所の異同があるが、その多くは極些細なもので、実質殆ど異同は無い、と言うに近い。幾つかこれも特色あるものを抜き出せば、「兎角この夜ハ大變の祟る夜と見えて各々大變を振廻すを」が「是れも亦大變を振廻すに」に、「門前に立つたる人山の如し」が「門前に山なす人立」^{ひとたち}に、末尾部分、「何にも取れずに鶉網ハモウこれぎりく、」が「トこれまで漕附けるのがヤツトコサ、」に、「後を略^{はぶ}いて書き申さねど多分千曲屋ハ仙三郎にお里を妻^{めあ}はせて目出度しの声を聞しなるべし二七日の御退屈謹んで謝したてまつる (をはり)」が「其後^{あと}ハ略^あいて書き申さず多分千曲屋ハ仙三郎にお里を妻はせたかと思へどナニモ小説が目出度しくの世話を焼^{きま}くに極つたものでもなければ深くハ穿鑿せずモウ此辺でお仕舞いく (明治廿三年九月作)」と書き直されたのが目に留まる程度であろうか。

以上が、「鶉網」改稿の実態である。

緑雨は、「作家苦心談 (其八) 斎藤緑雨氏が小説の由来及作に関する逸話 (第二号の続)」(『新著月刊』第四号、明治30・7)の中で、

自分は始め『かくれんぼ』を『うづら網』の筆法で、芝居見物の場からかき始めた、があ、云ふやうに書きかへた、詰り筆をちぢめる為に書きかへました。秀吉と五右衛門は団菊両優にあて、かいたのでしたよ。

と述べている。「『うづら網』の筆法」については、更なる考究が必要であるが（当然、ここでの『うづら網』は、初出本文の方を指している）、ここでは、『かくれんぼ』についてはあるが、「詰り筆をちぎめる為に書きかへました。」と述べている点が重要で、緑雨の小説作法の肝要な点に「筆をちぎめる」ということがあったことが推し量れる。『かくれんぼ』の執筆時期は、何故か従来余り触れられることが無く、『油地獄』より先じているということも忘れられ勝ちなのであるが、「文筆界の破廉耻漢」（『国会』明25・2・20〜3・19）中に『かくれんぼ』ハ乞食の所謂牛肉店の二階を写したるにあらざ、廿四年四月稿成り、同七月板成れるもの、という一節があり、明治二十四年四月完成と知られる。執筆開始は更にそれよりずっと以前からであろうから、明治二十三年九月末から連載された「鶉網」執筆の時点と、小説の文章・作法に関してさほど考えが変わっているとは思われない。ただ、新聞連載物には『かくれんぼ』のような書き下ろし単行本と違って（しかも『かくれんぼ』は、正にその「筆をちぎめる」方針で書かれた緑雨渾身の作である）、むしろ書き延ばすことが必要な場合もあるので、「鶉網」初出本文には、どちらかと言うとその新聞連載ならではの書き延ばしとも言うべき箇所が多々見出せる。それが、後年『見切物』に収める際に大幅に「書きちぎめる」方向で改稿されたものが、「鶉網」初版本文であると言いうことが出来よう（勿論、『かくれんぼ』程の極端な「筆をちぎめる」筆法が行使された訳ではないけれども）。

右の如く、発表形態の違いが、初出本文と初版本文との異同に関して大きく作用していることは間違いないが、もとよりそれだけではないことについては、各章ごとに縷々述べ来た通りである。

最後に一つ。緑雨の随筆「日用帳」（『太陽』第五卷第十号、第五卷第二十一号、明32・5（9）の「六一」）に、

○けぼくしき文明風の都を吹荒らせるよしは、われ早く、已に、しばく言へり。六七年の尚遠からぬ前迄は、一般に芸者屋の主人といへば、温かき飯に魚軒副へて食ふを落ちとすと、鶉網にかけの如き者なりしも、近き二三年は抱妓の玉とも、祝儀とも名のつかぬものに漸次賑らみて、公債株券の売買をなすも有りとか。おもふに這は恐るべき事にも、驚くべき事にもあらざるべし、腕盛のつゆの多少を論ずる世なれば、常磐と常磐家とを別たざる人の南北論を出す世なれば、女さへ見ればあながちに手を執らんとする世なれば、大神士の芸者屋の門に車を停めて白昼の出入を憚らざる世なれば。

の一項がある。これは、初出本文ではなく、初版本文「(一)」の後半部に、「一体芸妓屋の主など、云ふ者は温い飯を刺身で食へるぐらゐるが落だのに丸い物で残さうといふのからが間違ひだと言つ、」云々とあるのを受けたものである。

※本稿で引用した表現・語句には、今日から見て不適切と思われるものがあるが、作品の時代背景・文学的価値等を考慮して敢えてそのままとした。

(前号訂正)

- 『成城国文学論集』第三十三輯所載の「大久保夢遊『文明地獄極楽一周記』を巡って」(池田一彦)の
- ・八十五頁七行目「(一頁十八字×十二行)」は「(一頁二十五字×十二行)」の、
- ・一〇三頁十三行目「結跏趺坐」は「結跏趺坐」の誤りでした。訂正してお詫び致します。